

真生

第四卷 第五號

□キリストが救ひを求むる者に對して、先づ「汝は何を求むるか」と尋ねたといふことである。

□之はキリスト自身に於て其の人が何を求むるかを知らないが爲めではなく、其の人をして、自分の求むる所を一層新に深く明かにせしめんが爲めであつた。

□友よ、私共に此の問ひの來る時、我等は何と答へるか。此のことは人のことでなく、私共自身に於ても、今一度我は何を求むるかと反問して見る必要がある。

□自分たちは毎日何を求めてゐるか肉慾か財慾か名譽の慾か、或は佛たることを求むるか。或は畜生たることを求むるか。毎日のこと現在刻々の生活に於て、我は何を求むるか。

□佛道をたざる者、念佛を申すもの、はたして、我は何を求めてゐる。働かずし金を求め、働かずして名譽を望む、遊んでゐて往生し、働かずし成佛したい心でないか。

□佛とは佛の行ひをする人であり、餓鬼とは餓鬼の行ひを爲す人である。然らば友よ、現在の我は何を求めてゐるのであらう。

□自分の思ふ所、爲すところ、はたして何を求むるか。(念)

にここは來如

目次

●如來はこゝに	冠子
●光明主義と異安心(三)土屋觀道	山口常照
●おゝ念佛よ(三)	藤井貞邦
●宗教座談(三)	生 意 知
●萬苦還樂術	
●吾朋便り	

▽佛があるものなら信して見やうといふのは、まだ本當に求める氣になつて居らぬからだ。
 ▽眞劍に望み求める者の前には、直ちに佛は現はれ玉ふ。
 ▽甘い物があるなら喰てみやうと云つてゐる者は腹が膨れてゐる證據である。本當に喰えたる者は食の現はぬのを待つて居れぬ。如何にもし食を探し食を造らねばならぬ。こゝで突込んで食を見出すものである。それを奇蹟といひ、或は食なき處といふ、然し奇蹟の奇蹟は、有る處に有る物を發見した丈けで當然過ぎるほどの事實である。如來もその通り無いた思つてゐる者には食が目の前に在ても喰ふことを知らぬ。忘れたる者のみが腹の満つることを知る、貧しき者は福ひなり。▽自ら貧しさを知る者のみが佛のみ恵みを感じずる佛の前に自らの飢え、自らの恥ぢを知らぬ者は終に「眞實」の世界を味はひ得ぬ者である。
 ▽佛は求めざる先に與へ、叩かざる前に門を開いて叩けよ打てよと催促しつゝあるのに多くの者は眼を嚴の如く閉ぢて自ら眠りを食てゐる。そして佛の力でその眼をも開かして呉れど呪つてゐる。
 ▽然し佛を怨む前に、眼を開かめられるやうに佛の隣れみを乞ふ敬虔さがあらねばならぬ。信を獲たる他の者の如く自ら至らぬことを先づ愧づ可きである。求むる者に與へぬ佛はない、求めぬ先に與へてゐるのだから。
 ▽求めたる者のみが響を聞く、佛は自己より啓け、自分の内より生れる、そして自分自身が亦大如來の内にはぐまれてゐた事を沁々と感じさせられる。
 ▽死したる自分からは決して生きたる佛は生れぬ。(冠)

□春が来て櫻が咲き、夏が来て藤が咲く、これ程不思議な事はない、一体それは何故咲くのだらうか。
 □單に花の中に咲く力が收つてゐて、その力が出來たからでもあるまい、又陽や風や潤ひが外部から加はつて咲かしたものであるまい。花として現はる可き力が天地に充ち満ちて居り、その力が今櫻となり、藤となつて顯はれてゐるのに過ぎぬ、櫻や藤の外に花の實諦が無いと思つたら大間違ひである。花なき處にも花が咲いてゐる、此の目に見えぬ花の姿に通ふこそ花の眞相を知るものといふべきである。
 □佛の力、佛の恵みは天地法界に充滿してゐる、その力を享けて佛の花が此處、彼處に薫つてゐる。これを釋尊に見、これをイエスに見、これを阿波之介に見、これを私の上に見る、如來の全力は何れの一點からも零れて居り、何れの一塵からも曳き出す事が出来る。
 □花咲かぬ處にも常住に花が咲いて居り、時滿つれば爛漫の色を呈するのである、ものとして佛の生命を享けて居らぬはなく、彌が上にも佛の全人格を活現すべき實体である。
 □無量壽如來の光明顯赫にして十方を照曜す諸佛の國土に聞えざることなし。と、諸法一切悉くのもの、胸の奥まで照り輝いて在まし、一として佛のみ國に含まつて居らぬものは無い、皆佛のみ手となり、み足となつてみ佛を莊嚴してゐる、正に大如來のみ心に向て合掌し、大如來の願心を念すれば直ちにその本心を射てその本心を宿し、圓かに佛格を具現して成覺する。
 □そこに佛のみ手として働き、佛のみ足として立ち、自分を佛のみからだとして起てる眞生の大地がある、此の「如來のみからだ」として自分を起こす人生に非れば、生活は單なる形式の反復であり、一の機械的運轉に過ぎぬ。
 □此の生活と人格の根本に統一を認め、使命を感じて此の一道に參趨し、此一道から歩み出すことが信仰である。(冠子)

光明主義と異安心 (二)

土 屋 觀 道

一、妄りに人の信仰を批評してはいけない

諺に「犬虚に吠て萬犬實を傳ふ」と云ふことがあるが光朋主義に對する異安心問題も往々にして之に類する誤りがある。乍然是等の人々は先づ自分自身の安心が果して正しいか否かをこそ嚴密なる意味に於て深く反省すべきである。何となれば先づ自分の安心なり、人格が正しくて、初めて、人の安心なり人格をも正確に判断し得るからである。然るに世間多くの人々を見るに此の十中の八九は末だ自分の安心も定まらず又何等とすべき自己の人格もないくせに妄りに人の信仰なり人格を批難する人々である。斯くの如きは末だ眞實の宗教を知らないものであつて、吾人の深く反省すべき所である。

それに人の心と云ふものはともすれば自分の安心も確立してゐないのに、嘗て聞いた先徳の安心や法語と異つたやうに聞ゆる人の信仰は何となく受入れにくい感じがし、又自分が先方と何等かのことで感情でも悪くしてゐることがある場合、何となく其の人の信仰や人格にも賛成出来ないやうになることが多いものである。従つて世の中に異安心問題や、人の人格問題で色々と悪評する人々のあるは、多くはかゝる誤まりから傳つて來たものが少くない。従つて又人を誤まることも多いのである。然に信仰の問題は人の心の奥底に關するものであつて、時によれば自分自身の信仰内容でさへよほどの反省なくして

ては判然せぬことが多いものを、まして人の心の信仰をたゞ外から見ただけで、充分判らうはずもない。それを自分の信仰も定まらない人が何を標準として、人の安心を批判することができらうであらう。

二、自分の説のみが眞理ではない

それに若し自分の見る所のみを眞理として、人の見る所が自分と異なるからと云ふて之を異安心とするならば先方も亦それと同じ道理でこちらを異安心とするにきまつてゐる。さればかゝる場合の問題は雙方意見の相異であつて、單なる一つの水掛け論である。然に今日の多くの僧侶並に多くの信徒たちは此の光明主義の何たるかを知らないやうである。否少くとも我等の光明主義を目して淨土宗の異安心なりと云ふ人があるならば確に此の人の考へは吾人の考へと異つてゐる。然に世には往々自分の信仰さへ定まらず徒に人の信仰をのみ批評して得々たる人があることは大いに慎まねばならぬことである。

乍然眞實の信仰は之を覺えたのと信じたのとは暫く區別して見なければならぬ。即ち知つたのと信じたのとは別である。然に自分に信ずることもない人が何んで其の宗の信者であらう。而て又何等の信仰ないものが何んで此の宗の僧侶であらう。然に世にはともすれば單なる法語を知れるもの單なる宗義を知れるもの、それ等を信者と思つたり、それ等を僧侶と思つてゐる。而もかゝる人が反つて異安心者と聞く人をどこまでも排斥しやうとする。乍然斯の如きは決して正しいやり方でない。従つて信仰もなき人々が異安心など、云ふべき資格が無いではないか。吾人は寧ろ斯かゝる人々をこそ排斥せざるを得ないのである。今日の多くの僧侶並に多くの信徒の中にかゝる無信仰の人々はないであらうか、若し無いこととならば此の上も無い幸いである。乍然若も一人でもかゝる人があるならば、それこそ此の人

は少くとも自分自身に於て深く反省すべきである。而て自分は異安心者どころか無安心者であることを知らなければならぬ。而て又それと共に自分は人の信仰など何等批評するの資格もなく、又寺院生活や僧侶としての資格なども無いことを自覺せなければならぬ。加之彼等は又自らに記憶せなければならぬ。若し彼等自身にして一刻も早く其の職に自覺せずんば必ず來るべき青年民衆の爲めに早晚放逐せらるゝの秋が來ることを。而て舊き世間の人々は未だ此のことを知らないであらう。そして又今日多くの人々はこれ等の無安心者によつて多くの寺院が獨占せられて居ることを知らないであらう。而も友よ眞に醒めたる我等の先覺はいつもかゝる時代にこそ出現して、眞實の道を説いたでないか。然に之等の眞人は多くの場合民衆からまでも排斥された。而も其の實は異安心者と排斥せらるゝ人々こそ反つて時代を救ふ眞人であつたのだ。否むしろかゝる人々ならざれば眞に來るべき時代を救ふことさへも出來なかつたでないか。而て友よ！ 之は一体何故であらうぞ。見よ！ 而して是等の場合此の異安心者によつてのみ來るべき時代は救はれてゐるではないか。さうしていつも亦來るべき青年は此の異安心者の味方であることを。然は異安心者といはれる人が果して異安心者であつたのか、一見之を他より見れば彼等は確かに先師の形式を守つていない。従つてそこには先徳の安心と大いに異なる姿もある。乍然それは時代の背景や單なる形式の相異であつて、是等の相異の反面に尙光々として輝く眞人の自覺を見ればそこには常恒不斷の天地の眞理が脈々として其の内に流れてゐるのである。

三、似て非なるもの

之に反して自ら正流なりと主張する人々が必ずしも正流の人々でないことを知らねばならぬ。先人の模倣が宗教ではない。然に正流と云ふ人の信仰を見よ、それこそ彼等は單なる祖師の宗教や先徳の言行を模倣して如何にも正流そのまゝの如き姿である。乍然それは眞實の宗教を知らず所謂似て非なるの人々である。従つてそれはたゞ多くの法語を引くもそこには体験の自覺がない。又自分自身の信仰を深めんが爲めの法語でもなく、單なる法語の模倣である。而して時によれば自分を祖師の法語によつて先方に信者の如くに思はしめんが爲めの保護色に過ぎない。而も眞實に自ら体験せるの人々は別段他人の法語を説く必要もなく、たまゞ之を引くことあるもそれは自分の体験と祖師の体験とが一なることを眞に示さんが爲めに外ならぬ。而てそれは自分自身の体験を離れたのではないのであつて、前者の模倣とは異なるのである。従つて自分の体験が直ちに祖師の体験によつて現はされ、又祖師の体験が自分の体験によつて現はされると云つてもよい。故に其の言語や形式を離れて兩者に流れる眞實の生命を達観すれば一見その祖師と異なるやうに見える所も寸毫の異いもないことを見るのである。

四、光明主義者の間にも随分誤つた人々がある

乍然斯くの如きの誤りは何れの宗にもあることであるが、我が光明主義者の間にもかゝる人々がないではない。法然上人は斯く言はれた、二祖上人は斯く言はれた、而て辨榮上人も斯く言はれてゐる、だからこのことは斯くなければならぬ」と、彼等は祖師の法語や先徳の法語を引くことを何よりの動かすべからざる證據とする、而して貴兄の体験もさうかと云へば「いや私には何等の体験もない」と、而して曰く「辨榮上人は三昧發得の人である、故に總ての言葉が皆体験の現はれである。従つてそこには何等の誤りがない、然に吾等は未だ何等の体験もない、従つて吾人の云ふ所はどこまでも據るべき所がない。だから自分の見解を入れず、悉く上人の法語に依る」と。乍然之は自分に都合のよい法語をつぎ

合せた言葉に過ぎないではないか。而してかくの如きの言ひ方は古來から我が佛教徒に言ひならされた現し方であつて、今も尙之を以て何よりの方法であると思つ居る人がある。乍然斯の如きの方法は入信に至るまでの先徳の案内であつてそれが直ちに自分の信仰であるのではない。而して自らに体験なき人が何して上人が三昧發得の人であると云ふことを知ることができるか。而して又宗祖の法語なり、辨榮上人の言葉なりが一々眞實であると云ふことを体験せぬものが何して之を知り得るか。然に一々に宗祖の法語や上人の言葉のみを引くことに汲々として、自分自身の体験を少しも有せず、徒に來る可き多くの聽衆に是等の法語を盲信せしめやうとするが如き説き方は人類進歩の開發の上にも大いに反省すべきことだからである。

況んや此の外徒らに法然上人と辨榮上人とを會通することにのみつとめて、反つて兩者の尊き個性の特長を失くするが如き、寧ろ自らの罪をこそ懺悔すべきである。

其の他、自らには未だ確たる信仰も定まらず、而も徒らに自分の私利私慾の上から人の信仰を云々し人の人格をまで誹謗する人のあるが如きは寧ろ信者としての体面を汚すのみならず、人類進歩の向上の上からも大いに反省すべきの事柄である。然に近來の光明主義者と云ふ人の中に往々にして斯くの如き下賤下劣の幾多の徒輩のあることを耳にする。されど友よ、我等同胞は世にかゝる賤しき人もあることを此上もなき吾人の戒めとして、我等にはさう云ふことのないやうに心からつとめたいものではないか。眞實の宗教はごこまでも結局は自分自身の信仰であらねばならぬ、而して吾人はごこまでも天を中心とせる孔子の如く、神を中心とせるキリストの如く、如來を中心とせる釋迦の如き生活に生るのが佛教そのものである。されば吾人が先徳の言葉を引くもすべては自分自身の体験を自らに深めまた人にも深めしめたい考へに外ならぬ。従つて結局は自己体験の宗教でなくてはならぬ。(四、一六)

お——念佛よ！ (四)

山口常照

お——修道的向上躍進の念佛よ！

有限より無限へ

不平煩悶より恩寵へ

死より生へ

歡喜は胸に躍る

人は氣がふれんかといふ

生の歡び！ 生の歡び

歡喜の生活しばし續けらる

時に勝友はいふ

いゝ加減に歡ぶをやめよ

宗教は歡びに非ず 念佛にあり

此の一言に躍る心は落ちついた

反省又反省

お——そうだ我れ一人喜ぶをやめねばならん

矢張り多くは暗黒に惱めり

有頂天になるを謹むべし

眞劍の念佛は唱へられる

此の念佛の心を以て

無量壽經を讀みはじむ

敬虔の態度で讀みつゞく

讀んでは合掌し、合掌しては讀む

これ法藏はたゞ人に非ず

法藏の發心發願修行！

抑々誰の發心發願修行ぢや

魂は驚く！ 魂は躍る

合掌は熱を高め、胸は高なる

報身の如來は、お——報身の如來は！

光顔魏々として輝き初める

己が心は大悲の心にとろけ込む

我が人生の行手は益々明となる

目的がはつきりして來た

努めずに居られなくなつて來た

更に喜が湧いて來る深い強い喜が

すが／＼しい心地

もぬけはてたる聲をすすしき

更に心は落つく

強き我！ 何物にも畏れなし

我れ我れに生くるに非ず

如來我に生き給へり

お——如來を離れて我なく

我を離れて如來なし

お——尊しや順彼佛願故！

順ずとは佛心と凡夫心の一致融合

法藏の本願我が本願

我が本願即法藏の本願

前に本願成就の修道念佛は創する

太陽の光を受けし新月の

満月望みて進むごと

無限光惠の道は展開す

阿彌陀佛にそむる心の色にいでは

秋のこすえのたぐひならまし

如來みそめしたゞ一すぢに

純眞の愛を捧げつゝ

御名をたゞへて進まなん

お——修道的白道向上躍進の念佛よ！
(觀道曰く何き云ふ清い尊い向上の心であることよ)

お——覺佛体现の念佛よ！

如來の本願我が本願！

此の心もて家庭を見る

此の心もて國家を見る

此の心もて社會を見る

此の心もて宇宙を見る

凡てを愛する心は發る

凡てに佛光輝き居れど

多くは眼かすみ耳しひて

見れども見えす聞けども聞えず

お——やるせなき大悲の惱み

初めて知りぬ法藏の

立劫の思惟、長載の

惱みはかくと知る程に

己が使命のかすゝを

思ふにつけてやるせなき

身をもろくの苦毒の中にとむとも

我行精進にして忍んで終に悔ひざらん

自分の得脱の爲に、救の爲に

眞劍に申した念佛が

一人で黙して居れなくなつた

家庭の欠陥が目映る

職業上の欠陥が

國家の欠陥が

民族の欠陥が

世界の欠陥が(目に映る)

黙して居れない

妥協して居れない

使命を感じる

大なる使命を！

此の使命を感じるとき

祈りは深くなる

念佛は熱を帯びて来る

(觀道曰く、理想は實現を望み、望みはやがて實行となる)

x x x x x x x

宗教座談 (六)

藤井貞邦記

Y「信仰は相對性のものですか、それとも絕對性のものですか。」

上「初心の中は相對に見ゆるけれども絕對です。私の師匠は信仰の對象は絕對的相對だと云ふてました。絕對を求めて居るのに相對を求めたがる即姿を見たがるのです。これは求める當方が相對的

立場にあるからです。乍然相對の中に絕對を求めらるのです。而て絕對に到らねば信仰は満足できません。

Y「宗教と思想との關係をどう見て居られますか。」

上「思想は宗教的信念に達するまでの道程です。思想から理想に理想から宗教的信念に(眞理)進み。此處から又總ての思想が流れたのです。然るに法律だけで世を治めて行かうといふ考は随分偏してますね。

Y「法律は外部に現れた行爲を律するだけで内部の精神まで治めることは出来ません、それは藝術道德宗教等に俟つのです。もう一つ伺ひますが道德と宗教とは一致するのですかしないのですか。」

上「勿論一致するものです。乍然普通世間の道德に批ふれば宗教は超道德のものです。従て從來の社會生活に都合がよかつたといふ傳統的の道德と必ずしも一致しません。寧ろこれ等の道德を批判する出世間的道德です正しき宗教は眞の道德の根柢になるものです。」

第六日

晝の休みに

△「Nさんあなたはお上人の高聲念佛をどうお感じになりますか。」

N「何とも云へぬよい心持です。」

△「僕は本年一月實相寺のお別時に連つてお上人の高聲念佛に涙を流しました。嬉しいのやら悲しいのやら何といふてよいか生れて初めての感じでした。今度は又こんな事が考へられます。人間は

いくら強さうな事を云ふてもやつぱり自分より偉いものに絶る心がある。親に絶り甘へて漸く大きくなつたのではないか。ところが大きくなると「坊やお兄イちゃんそんなにお母アさんに張付いてはおかしい。學校の生徒さんがそんなに甘へては人様に笑はれます等とたしなめられて、だん／＼と此心を理智で抑へて行く様になります。しかし自ら氣が付いて居やうと居まいと心の底には孤獨な頼りない感じがある。それがお上人の念佛によつて引出されて来る爲ではないかと思はれて來ましたが」といふと側に居られたMさんが

M「二三年前此處でお上人のお別時のあつた時でした。上諏訪に病氣がもて目の見えぬ女の方があつて時々亡者が來るので夜も眠れないからおまじないをして下さいと云つてお上人に御願に來られました。其時お上人は其人を伴ひ御自身は如來の前にお立ちになつてあの高聲念佛で御祈りされました。其の時の時は又格別で私は側に聞いて居てとう／＼聲を立て、泣きました。あなたの云はる通り内心の切なる要求を世間が抑へて居るので

せうね。私も両親を失ひ子供をも失つた経験がありますが、あんなに泣いた事はありませんでした。」

N「全く音楽を聞いて居るやうですね。鍋冠日親上人が舌を切られて牢に入れられた時牢屋の中で題目を唱へて居ると道行く人が立止つたと云ひますが、大信仰家の音聲にはどこか偉大なる力があると見えますね。」

▽は此處で中座をしたが座に戻つて來るとNさんが御上人に話しかけてゐる。

N「先刻の御上人の口稱念佛は美妙な音楽のやうに聞えました。私は自分で念佛を唱へるよりも、あれをもつと永く聞て居る方がはるかによいと思ひました。」

上「氣が向かねば出来ません。信仰の世界に入り浸つた時のんびりした氣持で出るので。其氣持から流れ出る聲によつて更に已れが靈化されて行くのです。あなたのいはる通り念佛は美妙な音楽ですね。しかも生命を靈化する偉大な音楽なのです。」

夕刻の休みに

N「念佛と自他の調和とはどんな關係がありますか。」

上「彌陀は團體の中心です。思想にも中心があり天体にも中心があります。これは宇宙の本質です。中心は全体の爲めに存するので其心は慈悲です。それならなせ世界に弱肉強食の事實が存在するかといふ事になります。かゝる事實は生物の成長發展のために起つて來るのです。例ば舟の進行する爲めには水の抵抗力が必要であるが又妨げにもなるのです。かくの如く僅の原則の調合撞撃でやつて行く方が宇宙の組織は簡單に行くのです。人と人との争ひも進歩の爲めに必要です。之によつて或點まで發達することが出来るのです。そこで又強きに當る爲に共同するといふ方面も出て來ます。それから以上はもはや争はんでも進んで行ける世界があります。即自覺の世界です、この世界では競争は却つて文化を破壊します。さういふ譯ですから子供に平和ばかり勧めるのは宜くない、彼等は遊戯の勝敗についている／＼の工夫を凝しま

す。この勝敗の心を導いて正々堂々と争ふ様に導いたらよいのです。我々は現實を否定する事は出來ない。現實に立脚して現實をいかに改造すべきかを考ふべきでせう。

N「生き物を食ふといふ事は命を愛するものゝ忍びない處ですが」

上「殺して食ふてよい自覺が生じたら殺してまで食ふかも知れません。」

N「良寛が虱を紙に匂はせて遊び又元の肌着へたけて「蚤虱音に鳴く秋の虫ならば我ふところは武藏野の原」と詠んださうですがあゝした心持は上「我々にもありますね。一の遊戯氣分でせう。」

國民が良寛や一燈園を真似たら日本は亡びます。一燈園などは他人に頼まれ、ば何でもやると云ふてますが、そんなら頼まれたら泥棒もするかと云ふいたら何と答へるでせう。して見るとやつぱり己の見識によりて取捨する處があるではありませんか。吾人はいやなことは何といはれてもするのはいやです又するなと云はれてもせずに居られぬことはやりたいものです。何事でも無見識ではなら

ぬと思ひます。かど云つて何でもかでも見識をふり廻せといふのはありません。大ていの事は大目に見て、見流し聞き流して眞實の世界に生く可きです。

N「宗教は國家を認めますか。」

上「宗教は煩惱さへ認めてゐるのですもの國家を認めます。只利己的國家主義は悪いと云ふまでいす。無分別の平等はいけません。我國家を認めることは外國を否定する事ではない共に認めて進まうとするのです。我が子を認めて他人の子を認めぬといふわけはありません。人間は我身体にさへ不公平の態度を取つて居ます。例へば頭へ埃がたかつても平氣で居るが眼へ埃が入つたら大騒ぎして之をとり去ります。他人の子と我子とをいはゆる平等に扱はふといふ事は今の例でいふと頭の埃も眼の埃の様に拂へといふことですから、それでは潔癖の病となつて生きて居られなくなります。手と尻を同様にしやうとか釜の中と外を同じやうに磨かうとか考へるのと同じでせう。されば眞實の信仰に入りますと、さうした平等が

なくなつて、時處位に於ける最も正しい真人の生活が始まります。柳は縁のまゝにして自然の姿であり花は紅のまゝにして自然の姿であるやうに、人は人のまゝにして而かも自然の姿であります。佛といふと何か變つた。生活でもするのかわと思ふ人がありますが決してそんなものではありませぬ。たゞ、人は人として、眞に人たるの道に生

きることが即ち覺めたる人の生活です。それをこそ即ち佛の生活神の生活といふのです。されど眞實の人生とは何でありませう。人の人たる道とは何でありませう。限りなき人生の行路眞に心して永劫に輝く如來の光に生きてこそ始めて此の真人の生活は成就せられて來るのであります。

(終)

萬苦還樂術

生 意 知

僕は英語程嫌ひな課目はなかつた。色々の原因もあらうが只だ下手であつた事に歸着する。

學校を卒へてからも英語は必要だと思つて英語の講義録や研究の参考書も色々を買つて見たが、妄念妄想の多い僕には活用するまでに修得することが出來なかつた。が然し嫌ひな教科書の一片を原

文や直譯の言葉は忘れたが、今も尙ほ忘れることの出來ない話がある。それは「ゴールテンタツチ」の話である。夫れは昨年長岡博士の發明せられた人造金の製法より少々進歩した萬有還金術の成功談であるが、限りなき希望の湧く生きた人間には其の術在ることによりて非常に災いされた。

話は斯である。「或る偉大な力を有する神様が現はれて如何なる願でも授けてやるから、何か望んで居ることがあれば願へ」と仰せになつたので、或る男は直ぐに願つた「私の手の觸れる物は總て

金に化す術を授けて下さい」と授けて貰つたが遂に其の術あるが故に失敗に終り再び神様に願つて其の術を取戻して戴いたと此の話を教へられた時子供心に思つた。折角如何なる願でも授けて下さる神様が在つたならば何故自分の意の如くなる術を授けて戴かなかつたのか、若し神様が私の祈願を叶へて下さるならば此方法を授けて下さいと願ふにと空想に耽つて居た。それは今から十七八年も前の事だ。然し空想とは言へ其の實衷心からの願ひであつた。此の絶望に近い希望は年と共に進展して思想の根底に力強く喰ひ込んで一の力となつて動き出したのである。

他人に話せば無法だと笑はれるであらうが僕自身に取りては至極眞面目である。

キリストの聖書の「求メヨ然バ與ヘラレン」と言ふ言葉とギリシヤの神殿の扉に記されてあると言ふ「神ハ自ラ助クル者ヲ助ク」と言ふ言葉の眞髓

を掴んだ。

希望及び空想を理想化し理想を現實化し具体化する所に各人の力は見出されるのだと思つたのは、つい五六年前であつた。其思想も漸次進轉し僕は妄念妄想を精練し純一と成した眞の希望を具体化せねばならぬ是れが生命あり力あり意義ある生活だと自分も信じ他人にも傳宣するやうになつた。事實に於て意の如くなる正しき一筋の道が開かれて居る事に氣付いた。餘り大袈裟になるか知らぬが是を萬苦還樂術と命名した。

此の術を體得するには何にも七六ヶしい修業や苦行はいらぬ、只だ各自の眞面目に人生を達觀することだ。

眞面目！ 眞面目！ 眞面目！

眞面目に眞剣に求めることによりてのみ吾々の希望は満たされるのである。

萬苦還樂術成巧の秘訣は是れだ。

□ 吾朋便り

◎信州松本 長澤嘉一郎様

拜啓先日御出かけ下さいました節は氣のきかぬ私のごとて何もかも手落ちばつかりして申譯ありませんでした、それにかゝはらず血のある御説教によつて當夜集りました總べてが或るものを掴み得て糧にすること出來たのを見聽きして嬉しく思ふと同時に謹んで感謝いたします。そしてこの感謝は單に私だけでなく恐らくその晩の總ての人の心だと思はれます。

(眞の生涯なるものが私と距る十萬里だとしてそして私が一生努力してなほ一寸しか近寄り得ないとしても私は私の努力を断ちはいたしませぬ)

◎東京 土屋觀道より

お正月の來たのは此程のやうな氣がしますのに、

もう春の半も過ぎ去つてしまいました。かうして日夜に過ぎ行く歲月が其のまゝ私共の命であることを思ふとき、いつも過ぎ行く人生の速いことが今更のやうに感せられてなりません。

道友の方々には其後御變りも在らせませんが、静に思い廻らしては過ぎにし友の昔が慕はれてやるせない心さへ起ります。それにつけても昨今に於ける私の急がしさ、やつこのことで一昨日名古屋から疲れて歸京した處です。一月以前の脚氣と引つゝいての傳道の疲れとが風邪と共に私の身心をぐたぐたにしたやうです。乍然之も慈光の宣傳に及ばす乍らにも役立て、いたゞいたかと思ひますれば寧ろ私の本望です。

それに近頃の道友が日に増し眞剣の度を加へて來たことはほんとうに此の上もない私の喜びであります。之は主として私自身にも信仰宣傳の對象がどこまでも知識階及並に青年中心の思想信仰の問題に專注して居たからでもありませうが少くとも近來道友の各位諸彦が非常なる自覺發奮の上に立たれていることが大なる力なりと認めずにはあら

れません。さうして又此のことは正しく眞に宗教を解せるものの當然の歸結でありまして今や正に吾人の宗教は單なる僧侶の手を離れて人類の宗教となつて來たのであります。

今度の行基寺三味會も案外に道友の集りが多かつたのに驚きました。そして夫れが悉く心からなる道友ばかりであつて、私をして服藏なく信する所を語ることを得しめたことはこれ又近來にない私の喜びでした凡そ人といふ人の多い中であつた集りの生活が果して幾人幾ヶ所にあることであらませう。一年の中に或は又一生の中にあつた友の集りは滅多に得られない人生幸福の一でありま

す。乍然私共の集りは單なる集りを以て樂しみとするのではありません、皆悉く眞に生きんが爲めの集りであります。従て集まると云ふことも時にはまたなき樂みでないこともありませんが、かうして集つて共に身心の淨化を計り、更らに下山の上の眞の活動にこそ更に一層の樂みを感じるものです。されば色々な仕事の爲めに遙々來たいと永年の間豫期して居ながらも仕事の都合や何かの都合で來ることのできなかつた友も少くなかつたことを甚だ遺憾に思つたのです。而て私は謹んでかうした友の眞の生活を心から幸あれと祈らずにはゐられません。(四月二十七日)

行基寺別時三味會

參加者氏名

住 所	氏 名	全
靜岡市西草深町	加藤 ゆう	全
全 住吉町	藤井 とし	全
愛知縣海部郡	黒宮 平八	全
	黒宮 孝壽	
	黒宮 琴枝	
	黒宮 榮子	
	桑原 静子	

大垣市西側町	満岡 せい	全	東京市日本縣區	瀨川 幸磨	全	新通町	畑田 はつ
全 廓町	桑原 省三	全	全	瀨川 系重	全	岐阜市若森	大野 專明
岐阜縣海津郡	栗田 由松	全	岐阜縣稻著郡	辻 儀作	全	不破郡長松	廣▷ 諦音
全 三輪研雄、山田鎌吉、古川安			岐阜市高野町	伏見 儀	全	名古屋市末廣町	鷺津 太七
兵工、加藤まつ、伊藤鶴吉、			全 矢嶋町	白旗 靈光七	全	東區室町	山田 恵休
古川久平、加藤忠平、古川庄			全 港町	伊藤秀次郎	全	岐阜縣海津郡	三輪 てう
松、伊藤忠四郎、加藤某、			全伊藤はな、河瀬音吉、松浦重	三、伊藤かね、片洞十郎、	全	東京市芝公園地	三輪 すみ
全 城山村羽澤	伊藤 宇助		河瀬きみ、小澤やす	米田 傳司	全	岐阜市港町	神谷善之進
全 栗田主計、上田喜八、			大阪市天王寺區	米田 せつ子	全	小能町	久世 くま
全 山崎	高木 貞美		大阪市北花區	野田 三郎	全	養老郡下多度村	高木 彈順
全 高木錠子、高木きん、増田明			四日市市北川原町	中野新一郎	全	海津郡福岡	高木家夫婦
順、志村俊靜			三重縣桑名郡	伴 又一	全	協野	田中 戒孝
愛知縣海部郡	服部猪太郎		全 員辨郡	野村 光圓	全	協野	伊藤 音吉
全 津嶋町	大崎 喜助		愛知縣海部郡	松平 春子	全	駒野	藤田 善淨
全 中野善英、錠	清		名古屋市中區御器所町尾口ぎん	鷺津 のぶ	全	堺市寺地町	小野 よね
岐阜縣海津郡	安田 恢順		全 末廣町	淺野 孝眼	全	松浦卯之助	松浦卯之助
全 長谷川ふさ、鈴木てつ、澁谷			全 西區千歲町	渡邊 初枝	全	右の外毎日通ひて念佛並に講話拜	己上
てい、吉田せつ			全 江川町横町		全	聽に來りし者多數あり一々の姓名	
横濱市山海岸通り	山崎 作藏						

寄贈並誌代佛込芳名

○寄贈の部

- 金拾圓原吉郎様 全立川圓月様
- 金五圓浦賀一老婦人様 全浦賀 眞福寺様 全長谷川幸磨様全 三上善海様 全杉山喜三郎様 全尾上さん様 全太田大信様
- 金壹圓岩崎親雄様 七六〇
- 誌代の部
- 金七圓武田哲哉様
- 金五圓中川甚一郎様
- 金參圓若林ケイ様 全白根澄海 様全弓場アイ様 全山里秀隨様
- 金貳圓野川慧俊様 全玉腰孝俊 様 全米田傳司様 全古家一男 様 全岩崎親雄様 全小池上春 五郎様 全加藤教純様 全山上

智導様 全高橋六平様

- 金壹圓五拾錢松岡行藏様
- 金壹圓參拾錢福岡遠賀郡楠橋專 福寺様
- 金壹圓長畑須賀男様 全上由正 順様 全笹木新八様 全上條次 郎様 全藤森常二様 全恒川薯 一様 全上條克己様 全神尾承 眞様 全沖賀專福寺様 全北川 藤助様 全長谷川重藏様 全佐 溝日出一様 全藤田高印様 全 高田しま様 全藤村章様 全伊 藤武夫様 全中川孝子様 全西 田稱惠様 全岡久江様 全米田 吉堯様 全石井敦導様 全小川 彦宏様 全神谷學周様 全野田 三郎様 全會我尾昌治様 全高 島康天様 全古賀勢次様 全青 柳知月様 稻葉新司様 全礎田 まさ様 全惠本ひさ様 全中川

五十子様 全三浦辨定様 全伊 藤かね様 全松浦重三様 全大 野直一様 全内田鐵之助様 全 小澤やす様 全川○春吉様 全 伊藤花子様 全片桐太十郎様 全河○きみ様 全宮崎うめ様 全深田盛次様 八六〇

定價一部十錢 半年六十錢 一年一圓 振替口座東京四七二八八番 眞生社

編輯兼 土屋 觀 道 發行所 眞生社

東京市芝區芝公園第十四號地九番

印刷所 三井 清 次

東京市芝區三田四國町二番三號 印刷所 玄々堂印刷所

大正十一年二月二日第三種郵便物認可大正十四年四月三十日印刷納本大正十四年五月一日發行(毎月一回一日發行)第四卷第五號